

史記貨殖傳物價考證

宮 崎 市 定

一 漢代の物價記錄と史記貨殖傳

漢代の物價を知るための史料には大凡そ三つのグループがある。第一は漢代の諸書に散在する斷片的な史料であり、これについては既に民國十八年發行の燕京學報第五期に、瞿兌之の「西漢物價考」が載せられて居り、零細な材料をよく蒐集している。第二は近出の漢簡であり、その土地が邊境という特殊な地帶ではあるが、當時の生活をまざまざと傳えた根本史料であり、特にその中の物價に關する記錄は甚だ珍重すべきである。これについてはこの道の専門家とも言うべき勞榦氏の力作「居延漢簡考釋」（以下引用には考釋と略す）及び「漢簡中的河西經濟生活」（歷史語言研究所集刊十二本）があり、これを利用した平中荅次教授の「居延漢簡と漢代の財産稅」（立命館大學人文科學研究所紀要一號）、及び最近の宇都宮清吉教授著「漢代社會經濟史研究」の第三章西漢時代の都市、がある。そして第三は宇都宮教授が前著で取上げ、私もまたこれから問題としようとする史記貨殖傳中の物價一覽表とも言うべき記事である。

史記貨殖傳の中に當時の物價を推定すべき一覽表が載せられているのは周知のことであり、凡そ支那學に志すほどの者は誰しも一度は必ずこの表から前漢武帝時代の物價を復原して見ようと取りかかつて見たに違いないであらう。私も今か

ら三十年ほど前、大學生であつた時分に内藤湖南博士の講席に列し、東洋古代史の普通講義を受講してそのレポートにこの貨殖傳を題材として課せられ、非常な興味を以てこの問題に取掛つては見たものの、その最初に出てくる馬・牛・羊・麋の記事解明がどうしても出來ず、ただ舊説に従つてお茶を濁すの外なかつた。其後度々同じ問題に立向つたが遂に讀解の鍵を得ず、近時たまたま或る必要から久し振りで再び手を染めたところ、今度はどうやら曲りなりにも解決に到達したと信ずる。果して私の解釋が當を得たものであるかどうか、私案を披瀝して大方の批判を仰ぎたいと思う。

さて貨殖傳の問題の個所は當面必要な部分だけ原文を引用すれば

封者食租稅。歲率戶二百。千戶之君。則二十萬。朝覲聘享出其中。庶民農工商賈。率亦歲萬息二千。戶百萬之家。則二十萬。而更徭租賦出其中。衣食之欲。恣所好美矣。故曰。陸地牧馬二百蹄。牛蹄角千。千足羊。澤中千足麋。水居千石魚鰲。山居千章之材。安邑千樹棗。燕秦千樹栗。蜀漢江陵千樹橘。淮北常山已南河濟之間千樹萩。陳夏千畝漆。齊魯千畝桑麻。渭川千畝竹。及名國萬家之城。帶郭千畝畝鍾之田。若千畝卮茜。千畦薑韭。此其人皆與千戶侯等。然是富給之資也。不窺市井。不行異邑。坐而待收。身有處士之義而取給焉（中略）。凡編戶之民。富相什則卑下之。伯則畏憚之。千則役。萬則僕。物之理也。夫用貧求富。農不如工。工不如商。刺繡文不如倚市門。此言末業貧者之資也。通邑大都。酤一歲千釐。醢醬千瓠。醬千甔。屠牛羊豕千皮。販穀糴〔糴〕^①千鍾。薪藁千車。船長千丈。木千章。竹竿萬个。其輶車百乘。牛車千兩。木器髹者千枚。銅器千鈞。素木鐵器。若卮茜千石。馬蹄②千。牛千足。羊豕千雙。僮手指千。筋角丹沙千斤。其帛絮細布千鈞。文采千匹。楊布皮革千石。漆千斗。麋麴鹽豉千荅。鮐鯨千斤。魴千石。鮑千鈞。棗栗千石者三之。狐鼯裘千皮。羔羊裘千石。旃席千具。佗果菜千鍾。子貸金錢千貫節畧會。貪賈三之。廉賈五之。此亦比千乘之家。其大率也。佗雜業不中什二。則非吾財也。

とあり、中でも傍點を附した部分が特に問題のある所である。

司馬遷の意見によれば千戸の邑に封ぜられた諸侯は結構な身分であり、毎年一戸平均二百文を租税として徴収するから二十萬の収入を得る。併し庶民と雖も若し十分な資産を有して生産を挙げれば年二十萬の収益を擧げることが難事でない。またたとえそれほどの資産を有しなくても巧みにそれを運轉して大量の商品を扱えば、矢張り同様に年二十萬の収益を得ることが可能であると言うのである。上述の引用文は中略した箇處を境として、それ以前は各種生産資本に關した數量表であり、それ以後は取扱う商品の數量表であることは一讀して明瞭である。

二 馬牛羊麋の價格

先ず史記貨殖傳中、最も難解な馬牛羊麋の條から始める。いま上に引用した原文中、傍點を附した二箇所を從來の解釋に従つて大意を説明すれば次のようになる。

(前段) 陸地では(A)馬二百蹄、(B)牛の蹄角千、(C)羊千足、(D)澤地では麋千足の何れかを所有する者は百萬錢の資産家と
言うべきである。

(後段) 大都會において商業に従事し、二割の口錢を前提とし、年間に(a)馬蹄噉千、(b)牛千足、(c)羊千雙、(d)麋千雙を
賣買すればその収益は二十萬錢である。

この文中の數値を現わす言葉は極めて特殊な表現を用いているので之を分り易いように翻譯しなければならぬ。この史記の文は殆んどそのまま漢書貨殖傳に引用されているのでいま兩書の注釋を參照し從來の解釋をそのまま紹介すれば

(A)馬二百蹄とは五十匹のこと。これには別に問題がない。

(B)牛蹄角千とは百六十七匹のこと。蹄は四個、角は二個、合せて六であるから、六で千を割ると百六十七弱となる。

(C)千足羊。二百五十頭のこと。

(D) 千足。同じく二百五十頭のこと。

(a) 馬蹄噉千。噉は口のこと、四蹄一口合せて五で、千を割ると二百匹となる。

(b) 牛千足。二百五十匹のこと。

(c) 羊千雙。二千匹のこと。

(d) 麋千雙。同じく二千匹のこと。

右のA B C Dは夫々萬錢に相當する資本であると言うから、そこから各々一匹の價格を割出すことができる。即ち

(A) 馬二萬錢 (B) 牛六千錢弱 (C) 羊四百錢 (D) 麋四百錢

同様に、a b c dは夫々二十萬錢の口錢を得べき取扱い數量であり、全體で價格百萬錢、その口錢は二割で二十萬になると言うから、ここからも一匹の價格を算出することが出来る。この計算は最短距離で行けば、各項の匹數で百萬を割ることになる。その結果は

(a) 馬五千錢 (b) 牛四千錢 (c) 羊五百錢 (d) 麋五百錢

				第一表	
麋	羊	牛	馬	(前段) 百萬錢相當の資産	
				原文	匹數
				單價	
千足	千足	蹄角千	二百蹄		
D 250	C 250	B 167	A 50		
400	400	6,000	20,000		
千雙	千雙	千足	蹄噉千	(後段) 二十萬錢收益の商販數	
				原文	匹數
				單價	
d 2,000	c 2,000	b 250	a 200		
500	500	4,000	5,000		

となる。但しこれは買入値段であり、賣る價はこれに各二割の口錢を加えなければならぬ。簡單のために口錢のことは暫く考慮に入れずして、以上を分り易く表に造れば第一表のようになる。

さてこの表を見ると、何としても納得の行かぬ點が生ずる。第一に前段と後段とは同じ條件の比較であるから、この表に現われる數字は互いにある均衡を保つたもので

あるべきである。最も望ましい均衡は上段の單價と下段の單價とが一致することである。資本として數えた馬の價が二萬で、賣買する時の價が五千とは納得できない。もし上段の馬は母馬であり、下段の馬は仔馬であるとするならば、馬の場合はそれでよいが、羊の場合に母羊が四百で仔羊が五百と逆になつてくる。上段と下段が若し一致せぬとしても、その間に何等かの比例が存在しなければ均衡がとれないのである。

次に匹數も本來ならば上段と下段が一致すべきものである。何となれば上段は資本百萬錢に價する匹數であり、下段はここに示した匹數の價格の二割が二十萬錢になるならば、匹數全體の價格は丁度百萬錢の筈だからである。馬を五十匹持つて居れば百萬の資本であり、別にまた馬二百匹を賣買すると全體の價格が同様百萬になり、そこから二十萬の口錢が得られるというのは辻褃が合わない。若し一致しないとしても上段の匹數と下段の匹數との間に何等かの一定した比例がなければ均衡のとれた表とは言えない。そこで何よりも急務は、この表に現われた數字を相互に均衡を得たものに改めることではなければならぬ。

ところで數字を改めると言つても、原文の數字や單位を改めることは、言わば一種の暴力とも言つべく、よくよくの場合でなければ許されぬことである。若し一字位を改めてすつきりした表になるならばそれも厭わぬ所であるが、この場合是一字や二字では追付きそうもない。さすれば残る所は解釋の仕方を改めるより外はない。既に先學が揉み抜いたあとを、今更新解釋でもあるまいと思われるかも知れないが、私には私の考えがある。これから魔法のような手品を御覽に入れようと思う。

馬の二百蹄と蹄噉千については私としては從來の解釋で異存がない。尤も史記索隱に一説を出して噉は口のみならず、身體にある九つの孔だと言うが、さすれば蹄噉は合せて十三となり、蹄噉千は七十八匹弱になる。併しこの數を代入した所で表の數字が一ぺんに均衡を得てくるわけのものでない。それよりも司馬遷がこんな妙な表現を用いたのは、恐らく結

果が成數となることを豫想してのことと思われるので、既にはつきり二百という簡単な數が出ていのであるから、これは動かすべきではあるまい。

次の牛蹄角千は問題が無さそうに見えて實は大いに問題になる。漢書注に孟康の説を引いてこの句を釋し

百六十七頭なり。馬は貴くして牛は賤し。此を以て率となすなり。

と言ひ、更に顔師古が之を敷衍して

百六十七頭の牛には、蹄と角とあわせて凡そ一千二なり。千と言うは成數を擧ぐるなり。

とあつて、異論を挟む餘地がなさそうに見えるが、前に述べたように、司馬遷の一覽表は後世の吏牘と異なり、極めて大雑把な比例を述べたのであるから、結果は恐らく簡単な成數を豫想したと思われる。何を苦んで百六十七というような半端な數を出す必要があるうか。そして百六十七という數が出た所で、馬の匹數Aとの間にも、下段の牛の數bとの間にも、特に有利な均衡が生ずるとは思われない。

然らばどんな新解釋が可能かと言へば、牛の角は二本と定つてゐるから、ここには疑義を挟む餘地はない。すると残る所は蹄である。よつて思うに牛の蹄は馬の蹄と違つて二つに割れている。動物學上の言葉で言へば馬は單蹄類に屬し、牛は双蹄類に屬する。そこで牛の蹄は四肢で八蹄と數え、これに二角を足すと十となる。牛蹄角千とは正しく牛百匹であるに違ひない。さすれば馬の數との間に簡単な比例が生ずることになる。恐らく孟康先生は牛の蹄を見たことがないか、或いは彼の見た參考書に牛は双蹄類なりと書いてなかつたのであろう。顔師古以下の學者も孟康説を鵜呑みにし、また前文に馬二百蹄とあるのに引かれてつい牛の蹄をも馬と同じように解釋してしまつたものと思われる。更に想像を逞しくするならば、司馬遷が馬と牛と同じ蹄字を用いて、一方では一を示し、他方では二を現わしたのは、彼の皮肉ないたずらで、うつかりすると百六十七というような半端な數が出るから其時は考え直せと言ふ意味であつたかも知れぬ。孟康はまんま

とそれに引掛つたと言ふべきであらう。

ところで上段の牛Bを百匹とすると、今度は下段の牛b二百五十匹という數が氣にかかる。何となれば、馬は上段A五十匹、下段a二百匹で、一對四の割合であるが、牛が上段百匹、下段二百五十匹では、その割合が一對二半で、あまりよい均衡ではない。そこで次に牛千足という、あまりにも明瞭すぎる字句の解釋が問題となる。

足と言ふ字は説文に

人之足也。在下。

とあつて、特に人の足なり、と言つて獸の足ではないとことわつてゐるが、實際には鼎の足にも獸の足にも使われている。但し足の字には、説文に、下にあり、と言つてゐるやうに、人の足になぞらえて特に後肢だけを指す用法があつた。晋書卷十一、天文志にオリオン星座を指す參について

參。白獸之體。其中三星橫列。三將也。東北曰左肩。主左將。西北曰右肩。主右將。東南曰左足。主後將。西南曰右足。主偏將軍。

とあり、オリオン星の大きな四角の部分に白獸の身體に見たて、北（上）部を左右の肩に、南（下）部を左右の足にあててゐるのである。漢書卷廿六天文志では、やはりこの星座を白虎に見たて

其外四星。左右肩股也。

と言つて、足の代りに股という字を使つてゐる。また西京雜記に

廣川王發變書塚。明器朽爛無餘。有一白狐。見人驚走。左右戟逐之。不能得。傷其左足。夕王夢一丈夫。鬚眉盡白。來謂曰。何故傷吾左足。仍以杖擊王左足。王覺左脚腫痛生瘡。至死不差。

という神怪な話を傳えるが、ここでも狐の左後肢を人になぞらえて單に左足と言つてゐる。何れにもせよ、獸の身體を人

に比べて、その後肢を特に足とか股とか稱して、前肢の肩に對せしむる用法があつたのである。牛の蹄で世人を誑して嘲笑した司馬遷のことである。牛千足もこの場合は、後肢千本、即ち五百頭のことであろう。そうすれば牛に關して上段百頭、下段五百頭、その比例一對五となつて、前の馬と略々均衡を得るに近い。

すると必然的に羊と麋の場合、上段の千足は何れも五百匹としなければならぬ。下段の千雙は二千匹に間違いないから、上と下とが一對四の割合となつて落付く。更に全體を見渡して、上段と下段、更に横にA B C Dの割合を見ると大凡の均衡がとれているから、これ以上の均衡を望むことは先ず無理であろう。

匹數に新しい數字が與えられれば、單價の數値も從つて變つてこなければならぬ。この新しい數値を以て前の表に置きかえると次の第二表ようになる。

第二表	(前段) 百萬錢相當の資産				(後段) 二十萬錢收益の商販數			
	原文	匹數	單價		原文	匹數	單價	
馬	二百蹄	A	50	20,00	蹄噸千	a	200	5,000
牛	蹄角千	B	100	10,000	千足	b	500	2,000
羊	千足	C	500	2,000	千雙	c	2,000	500
麋	千足	D	500	2,000	千雙	d	2,000	500

これで一覽表は甚だすつきりした簡單なものになつた。^⑨併し問題はまだ片付かぬ。それは上段の單價と下段の單價とが餘りに違いすぎることである。資産として所有する馬牛の單價が、商品としての馬牛の單價の四倍、五倍になることは一寸考えられぬ。尤もこれを無理にこじつけようとすれば、色々な場合が考えられぬこともない。資産としての馬は母馬を指すとしたらばどうか。漢書卷

六、武帝紀元狩五年の條に、連年の對匈奴戰爭のために天下に馬が少なくなり、牝馬の平價匹二十萬と定めたと言うから、此處に二萬とあるのは物の數でもない。併しそれが特に資産としての馬にだけ適用されるとすると難點が生ずる。いま價二萬の牝馬五十匹を所有し、毎年四十匹の駒を育ててそれを一匹五千錢に賣れば丁度二十萬錢になる。一寸考えると計算

が合うようだが、更によく考えると四十匹の駒は牝牡半々でなければならぬ。母馬と牝駒とそれ程値段が違う筈はない。また市上で賣られるものが若駒だとは別に司馬遷も言つて居らぬ。更に困るのは斃の場合である。母斃五百匹を有して、そこから毎年四百匹の仔豚を産ませて五百錢宛に賣れば二十萬錢になることはなる。併し豚のような出産力の旺盛なものは五百匹の母豚から四百匹の仔豚では今度はその數が少なすぎる。もし牡豚だけを市場に出したとすれば、牝豚の行きどころがなくなる。これはどうしても無理である。牛蹄をもちだして孟康をまんまと擔いだ司馬遷が、こんな所でぼろを出すとは考えられぬ。結局上段の單價と下段の單價とはそんなに大きな開きができては困るのである。ところで若しこの兩者を近付けようとするならば、こういう結果を招いた大前提、即ち上段の匹數は百萬に相當する資産であるという命題に疑惑を向けざるを得なくなる。

そこで史記貨殖傳の原文を更に讀み直して見ると、上段の匹數は必ずしも百萬に相當する資産として受取らないでも済むものである。それは生産に關した數量であることには間違いないが、生産資本そのものとは限らない。この場所で司馬遷が重點をおいているのは、二十萬という生産利潤である。だからその匹數は出産育成の匹數であることもあり得るわけである。こういう解釋は別に新しいものではない。既に史記貨殖傳ではこの下文において、水居千石魚鰲なる本文下において正義の解があり

言鰲澤養魚。一歲收得千石魚〔賣〕也。^④

とあり、石とは重さ百二十斤のことであるが、ここに言う千石とは資本所有量ではなくて、一歳の産出量だと解釋しているのである。果して然らば馬牛羊彘についての上段の匹數は牧場における年間産出匹數、出賣可能匹數とも見ることが出来るであらう。

若し上段の匹數を年産出量とすると、その全體の價格は百萬ではなくて二十萬である。そこで改めて計算をし直せば馬

一匹の單價は四千となる。下段の單價五千と甚だ近接してくる。牛は同じように上段二千で、これは下段の二千と全く一致する。羊の各單價は上段四百、下段五百でこれも甚だ相近い。うまく辻褄の合うのは前提が正しかつた證據である。故に牧畜に關する限りにおいては、上段の匹數は牧場における年間育成數を示すと解して間違いない。いま司馬遷が言わんとする所を、分り易く翻譯するなら次のようになるであらう。

- (A) 陸地の牧畜業で年に馬五十匹を増殖すればそれは二十萬の利得である。
 (B) 年に牛百匹を増殖すればそれは二十萬の利得である。
 (C) 年に羊豚各五百匹を増殖すれば、それは各二十萬の利得である。
 (D) 年

ここまで來たので、更に下段をも整理しよう。馬二百匹を商販し、二割の口錢を得て二十萬錢を儲けるとは、平均一匹五千で買つて六千で賣ることである。牛の場合は五百匹について、一匹二千で買つて二千四百で賣らねばならぬ。羊は五千で買つて六千で賣ることである。牛の場合は五百匹について、一匹二千で買つて二千四百で賣らねばならぬ。羊は五千で買つて六千で賣ることである。以上述べたことを表に示すと次のようになる。

第三表				年間二十萬錢を得る方法			
馬	牛	羊	麋	生		商	
				原文	増殖匹數	一匹賣價	一匹買價
二百蹄	蹄角千	千足	千足	原文	取投匹數	一匹賣價	一匹買價
50	100	500	500	蹄噉千	200	5,000	6,000
4,000	2,000	400	400	千足	500	2,000	2,400
500	100	500	500	千雙	2,000	100	100
1,000	400	100	100	千雙	2,000	100	100
1,000	400	100	100	千雙	2,000	100	100
1,000	400	100	100	千雙	2,000	100	100

この第三表を前の第一表と比較されたならば、恐らく何人も、從來の解釋による第一表を非として、私の見解になる第三表に同意されるだろう。繰返して言えば、史記貨殖傳中、少くも牧畜に關する限りは、上下段とも年間二十萬の収益をあげる方法を説いているのである。そして資本

の問題は勿論關係するには違いないが、この場合には暫く背後に隠れているのである。強いて言えば馬五十匹を増殖し得るような牧場馬群ということになる。これには或いは牝馬五十匹で足りるかも知れないし、百匹を必要とするかも知れない。同様に商販の場合においても年間二百頭を買賣するに、必ずしも二百頭分の代價百萬圓を耳を揃えてもつている必要はない。資本はたえず循環運轉すべきものである。運轉回數が早ければそれだけ資本は少くてすむ。若しも一年に五回完全運轉をするならば、馬二百頭の賣買するのに一回四十匹、代價二十萬錢ですむのである。私は嘗てこの下文に來る

貪賣三之。廉賣五之。

という文句が、商業資本の運轉回數を示すものなることを指摘した^⑤。即ち貪賣は口錢を貪るので運轉が遅く、三回しか運轉せぬ間に、廉賣は薄利多賣主義で五回の運轉を完了するの意味である。貨殖傳のような流通世界を描いた敘述を讀む時は、讀者の方でも融通を利かして讀まなければ著者の眞意を捕捉し難いであろう。

さてこれで史記貨殖傳に現われた馬牛羊豕の價格は大體見當がついた。即ち馬は牧場出賣價四千錢、市場價格五千乃至六千錢、牛は牧場出賣二千錢、市場價格二千乃至二千四百錢、羊と豚は牧場出賣各四百錢、市場價格五百乃至六百錢である。さて之を他の漢代史料の記載と比較した時に、果して鈎衡が得られるであろうか。この問題については最初に擧げた前人の研究で大體を盡しているが、更にそれらを繰返すならば、

(A) 馬價。前に引いた漢書武帝紀に一匹二十萬と見えるものや、漢書功臣表、任當千の條に馬を一匹十五萬で賣つたなどあるのは特制な場合で比較にならない。居延漢簡には

用馬五匹直二萬 (考釋・釋文卷三・四五五頁)

と見え、一匹の直四千になるから、貨殖傳の價格の一種と合致する。

(B) 牛價。同じく居延漢簡に

服牛二六千（同前・四五五頁）

用牛二直五千（同前・四六三頁）

とあり、服牛は恐らく車を挽く牛、用牛は耕作用の牛であろうが、一匹二千五百乃至三千という價を得る。これも貨殖傳の牛價に略々近似する。

(C) 羊價。同じく居延漢簡に、九百乃至千錢という價格が出て居り（考釋・釋文卷三・二七三頁）、貨殖傳の羊價の二倍以上に當つてゐる。併し居延簡の時代も判明せぬし、地里も大分に隔つてゐることであるから、兩者はそのまま併存させるべきもので、強いて一致を計る必要はあるまい。貨殖傳の物價考證はその直接の目的は司馬遷の考えた物價體系を知るにあり、それが材料となつて當時の物價一般が考えられるのであつて、更に言うならば物價の地域差、年代差があればこそ商業や投機も成立つわけである。もしも凡ての記録が一致するならば、記録は一つだけあれば十分だということになり、また漢簡の價格が確かで、それによつて貨殖傳の物價を凡て訂正してしまうならば、貨殖傳の考證などすること自體が馬鹿々々しいことになつてしまう。

こうして馬牛羊麋の大凡その價格が定まると、史記貨殖傳原文の他の一節、即ち本論初頭に引用した下段の中

屠牛羊麋千皮。

なる一句がわけもなく解決される。千皮とはこの場合千體の意味であり、結局、千體の牛羊麋を屠殺する屠者の口錢が二十萬錢であることを意味するに違ひないのである。牛羊麋と列べて記してあるから三者ほぼ同數と見て、いま牛三百三十匹、羊と豚は同價であるから合せて六百六十七匹とし、前に得た市場價格を適用して、合計千匹の買入値段を算出すると

$$2000 \times 333 + 500 \times 667 = 999500$$

の如く九十九萬九千五百錢、ほぼ百萬錢であり、二割の屠殺料を取つて肉にして賣れば正しく二十萬錢の利益が上るわけである。こんなに巧く計算が合うのは、前の私の價格算出方法が正しかつたことの證據になるものである。

三 魚・木材・田地・穀物の價

以上述べた馬牛羊麋に關する記事は、貨殖傳の原文において前段と後段との匹數が著しく相違しているが、他の部分においては前段と後段の數量が全く一致しているものがある。いま前段を上段に、後段を下段に排置して比較すると次のようになる。

(前段) 生産に關する數量	(後段) 商販に關する數量
(E) 水居千石魚陂	(e) 鰕千石
(F) 山居千章之材	(f) 木千章
(G) 帶郭千畝畝鍾之田	(g) 販穀糶糶千鍾

このグループは前の馬牛羊麋と同じ筆法で解釋するわけに行かない。尤も史記正義は前述のように(E)の千石を養魚一歳の増殖出賣量と解しているが、それでは下段の商販數量との間の均衡が失われてしまう。何となれば下

段の鰕は史記正義に雜小魚のことだとあり、上段の魚陂で生産される魚と對應すると思われるが、市場で千石を商販し二割の口錢が二十萬錢に當ると言うから、これも最短距離で計算すると、千石の原價が百萬錢、一石が千錢となる。ところで前段の魚陂が一年間に千石を増殖出賣すると、その價格は市場價格で二十萬錢どころでなく百萬錢に上る。もちろん生魚のようなものは生産地と消費地との間には大きな開きができるが、五倍も値段が違ふとすると、儲けるのは生産者でも商人でもなく運搬者だということになる。司馬遷は別の所で當時の諺を引いて、百里の距離へは薪を賣りに行つても引きあわない、と言つて位であるから、運搬費が五倍にもつく養魚業なら成立たないと考えたに違いない。

それならば養殖業に要する勞力を差引いた結果かという、それも考え難い。魚千石の產出によつて百萬錢の賣上げは

あるが、その中八十萬錢は勞賃として差引いて二十萬錢だけが収益だとするならば、この場合はそれで納まるが影響する所が頗る多い。前述の馬牛羊麋の場合でも、新たに數倍の勞賃を加算しなければ理窟が合わなくなり、理窟が合うと折角算出した物價體系が崩壊の危険に暴される。

千石の魚陂はそう深く考えることなく、常に千石の魚を養っている池と解釋してすみそうである。この池は魚千石ぐるみ、何時でも百萬錢に賣れる。そうでなければ毎年その中の二百石を賣出せば二十萬錢の収益を得る。だからその地位は千戸侯に等しい、と言うにすぎない。

同様にして(F)の山居千章之材は、いま直ちに千章の材を伐り出せる山林であろう。材木屋はこの山を何時でも百萬錢で買つてくれる。そうでなくても毎年二百章の材木を伐り出して賣れば二十萬錢になる。尤もそれでは五年でもとがなくなる勘定であるが、一方ではこれまで材木としての規格に適しなかつた若木が成長して伐採できるようになるのである。

同様に(G)千畝畝鍾之田も、その價格が百萬錢と見積られたのであろう。畝鍾とは一畝の年收穫量が一鍾のことである。

一鍾は普通に六斛四斗のこととされているが果してそれであり得ようか。この場合の檢討は寧ろ下段の(G)から着手するのが便利である。と言うのは、宇都宮教授が指摘されたように、穀千鍾の價が百萬錢に相當し、それを賣買して二割の手數料二十萬が得られるとすると一鍾の買價は千錢、六斛四斗で割ると、一斛の買價百五十六錢、賣價は百八十七錢となつてこれは少し高きに過ぎるのである。尤も前述のようにそれが司馬遷の獨自の物價體系として見ればよいわけであるが、但しその商品が民衆の日常生活に必須のものである以上は、米騒動にでもなりそうな法外な價格を、この場合に限り見逃すわけに行かない。そこで宇都宮教授は文字を改めて、千鍾は「千鍾者三之」の三之の二字が落ちたのであろうと説かれるが、之は別に文字を變えないでも解釋を改めることによつて片のつきそうなものである。

それは一鍾は普通に六斛四斗ということになつてゐるが、又別の解釋がある。即ち淮南子、要略訓の高誘注に

鍾十斛也。

という一句があつて、漢代の一鍾は十斛になつていたと思われるのである。鍾という單位が漢代においても實際に用いられたことは、大正の末頃、朝鮮平壤の對岸、船橋里から、漢の孝文廟の銅鍾が発見されたことによつても知られる。この銅鍾の銘には

孝文廟銅鍾。容十升。重卅十斤。永光三年六月造。

とあり、永光三年は元帝の治世、紀元前四一年に當る。尤もこの銅鍾の容量は十升、即ち一斗であるが、淮南子の注と讀み合わせると、漢代の鍾なる單位は既に六斛四斗というような不規則な四進法ではなく十進法に變つて居り、恐らく大鍾、中鍾、小鍾というようなものがあり、大鍾が十斛、中鍾が一斛、小鍾が一斗となつていたのではあるまいか。さすれば淮南子注の一鍾十斛の鍾は大鍾であり、孝文廟の銅鍾の一鍾十升は小鍾であるということになる。貨殖傳の千鍾は言うまでもなく千大鍾、即ち萬斛であろう。そして萬斛が百萬錢ならば、一斛は百錢に當り、これは當時としても考え得られる穀價なのである。

そこで千畝畝鍾田に戻ると、司馬遷はそこから年に二十萬の收益、即ち穀物にして二千斛が得られると言うのである。之は一畝當り二斛となるが、それが自作しての收穫か、或いは小作に出しての地代かを明言していない。古來百歩一畝の收穫量を一石乃至一石半としているので、漢代の二百四十歩一畝ならば一畝から二石四斗乃至三石六斗を得る。小作料は收穫の半額を取つたから後者の場合だと一畝で一石八斗、千畝で千八百斛の收入を得るので、その代價十八萬となり、略々二十萬に近い數を得る。恐らく司馬遷の意は千畝の田を、勞力を費さずにすむ小作に出した田の場合に取つたのであろう。原文の畝鍾、即ち一畝十斛の收穫は單なる比喻に止まるであらう。

次に上述の穀價一石百錢を他の史料と比較して見よう。居延簡には數種の穀價が現われるが、その代表的なものは、考

釋釋文三三四頁に

粟石百十。粟石百五。大麥石百十。

と出ているもので、これは恐らく斛のついた穀物を大石で計つたものであろう。これを脱粟して米とし、これを小石で量り直すとすると、その割合は同じく居延簡に

粟一斗。得米六升（考釋釋文二八六頁）。

凡出穀。小石十五石。爲大石九石（同前三二二頁）。

とあるので、粟の大石一斛と、米の小石一斛とは計算し直しても結局同じ斛數、同じ値段になる。正に宇都宮教授が「漢代社會經濟史研究」の中の「續漢志百官受奉例考」の中で指摘された通りである。

但し居延簡の中にはこれよりも遙かに高い穀價も記載されている。

勝之已得粟二石直三百九十。廣三石直三百六十。它錢三百五十。凡已得千一百（考釋釋文一七三頁）。

とあり、ここでは粟一石百九十五、廣一石百二十という價格が出ている。廣は穞麥（大麥の一種）であろうか。或いは粟二石は三石の誤りかとも思われるが、そうすれば石百三十で廣との均衡もとれてくる。貨殖傳の穀價は買價が石百錢であるから、賣價は石百二十となり、漢簡の穀價と略々一致する。穀價に限り、地方差があつたとしても、ある程度の一致が望ましいので、この點でも貨殖傳の物價は當時の眞實を語っているものだと言うことができる。

飢つて當時の田價はどれ程に見積られたであろうか。漢書卷六五、東方朔傳に

豐鎬之間。號爲土膏。其價畝一金。

とあり一金は萬錢であるから、さすれば一頃百萬錢となるが、これは明かに誇張である。漢書卷五四、李廣傳に李蔡爲丞相。坐詔賜冢地陽陵。當得二十畝。蔡盜取三頃。頗賣得四十餘萬。

とあり、三頃の地を實際に四十餘萬錢に賣つたのであるから、その價は一頃十三萬以上、恐らく十五萬前後であつたであらう。されば貨殖傳に千畝、即ち十頃の田は百萬錢、従つて一頃十萬錢と見積つてあつても特に高すぎることはない。そしてこの場合、居延漢簡で一頃萬錢とあるものと比較する必要はないであらう。

四 其 他 の 物 價

史記貨殖傳の他の部分では、前段と後段とがまた異つた對應の仕方をしている所がある。いまその部分を抽出して上段と下段とに分けて比較すると次のようになる。

(前段) 生産に關する數量	(後段) 商販に關する數量
安邑千樹棗	棗栗千石者三之
燕秦千樹栗	漆千斗
陳夏千畝漆	帛絮細布千鈞
齊魯千畝桑麻	竹竿萬个
渭川千畝竹	卮茜千石
千畝卮茜	佗果菜千鍾
蜀漢江陵千樹橘	
千畦薑韭	

この上下段を見比べると、上段は明らかに生産設備、若しくは生産資本であり、下段はそこから生産される商品である。そしてその數量的な關係は、上段の數量から毎年、下段數量の二割が產出される勘定に相違ない。何となれば百萬錢に値する千本の棗樹から毎年生産される棗實の代價が二十萬錢、下段三千石の棗の賣上代金の二割(六百石分)が同じく二十萬錢に當るからである。こういう數量的な比例より以外は考えられないであらう。

同様に千畝の漆樹は價格が百萬錢で、毎年漆二百斗、金額にして二十萬錢の收益をあげうる。千畝の桑田からは帛絮二百鈞、千畝の麻田からは細麻布二百鈞を產出し得る。帛絮は絹布と眞綿を合せて目方で量つたもので、一鈞は三十斤である。千畝の竹林からは毎年二千个の竹竿が得られ、千畝

の厄茜田からは二百石の厄茜なる染料、千樹の橘畑、千畦の薑韭畑からは夫々二百鍾の果菜がとれる。これらの年産は何れも純益としての年産でなければならず、その價何れも二十萬錢である。

史記貨殖傳の一覽表で前後段を對比させて取扱うべきものは以上で略々盡きたと思うが、なお個々に考察を加うべき個處が残っている。先ず後段中の

薪藁千車。船長千丈。

の文であるが、この船も從來は市場で賣買さるべき商品と見做されていたようであるがそれはおかしい。船は河岸で造られ河岸で賣らるべきで、市場などへ運ばれてくるものではない。だからこの場合の船は、千車に對する船千丈で、恐らく薪藁のような燃料を計る時に、車で計る方法と船で計る方法とが行われていたのではあるまいか。車の方は大凡そ積載量が定つていたので單に千車で現わし、船の方は大小一定しないが取りまぜて長さ千丈にわたる船に積載した薪藁という意味であろう。この下文には軺車千乘、牛車百兩とあるが、車輛ならば市場で賣られても不思議はない。もしも前の船が商品の意味するならば、當然この次に位置しなければならぬ筈である。

僮手指千。

この意味は注にある如く、奴隸百人であることに異議はない。ただ當時の奴婢の價格は他にも文獻、史料の徵すべきものがあるから、それとの比較を試みたい。さて僮百人の買價は百萬であり、二割の口錢をとつて賣れば賣價は百二十萬になる。故に僮一人の價格は一萬乃至一萬二千という所である。奴隸の價格もまた當時の文獻に徵すべきものがある。先ず居延漢簡には、よく引用される例であるが

小奴二人直三萬。婢一人二萬（考釋文四四五頁）。

の例があり、小男の奴は一萬五千、成人の婢は二萬と出ている。尤も立命館大學の平中荅次教授の説では、これは實價の

二倍に見積つてあるので、實際は小奴七千五百、大婢一萬であらうと言う。外に有名な王褒の僮約では一萬五千とあり、後漢時代になると應劭の風俗通に、老蒼頭の直二萬とあり、後漢書卷七三、朱暉傳の注に引く彼の女婢は金三斤（錢三萬）に値したとある。貨殖傳の僮の價萬錢は低きに過ぎるようであるが、これも彼の物價觀としてそのまま存在を認むべきであらう。

軺車百乘。牛車千兩。

軺車は馬車で、下の牛車とは構造の異つたものであらう。この文は居延漢簡と比較する時に特殊な興味が沸く。漢簡の中に

軺車一乘直萬。牛車二兩直四千（考釋文四五頁）。

とあり、軺車の價格は貨殖傳の記事で計算しても一萬となるのでびつたり符合する。牛車は貨殖傳では一兩千錢にしかないが、漢簡では一兩二千と二倍になつてゐる。史記、漢書等によると當時の商人は軺車を用いて天下を横行したので、恐らく遠距離用の輕車であるため移動に容易すく、その價格が全國的に平均してゐるに反し、牛車は短距離用の重車で、木材に不足する居延地方で特に高價だつたのであらうか。それよりも吾人の興味を引くのは、貨殖傳も漢簡も、軺車を一乘と數え、牛車を兩と數えている點である。似たような車でも、夫々特有の數え方があり、司馬遷が正直にそれに從つて書いてゐる點が注意されるのである。

子貸金錢千貫。節畧會。

この一文最も難解で自信ある解を得ない。目下のところは次のように考へてゐる。抑も引用文後段の商品は一年間に逐次買入れ、逐次賣却する總數量であつて、買入れのために支拂つた金額は合計百萬になり、その手數料は二十萬になるが、これは一時に百萬の資本を所有せねばならぬことを意味しない。前述の如く年間四回轉ならば二十五萬、五回轉なら二十

萬の資本ですむ。併しこの資本回轉にはそれだけの心勞と勞働を必要とする。最も容易に二十萬の収益を擧げる方法は百萬の現金を耳を揃えて他人に貸し、他人に運轉させてその上前をはねるやり方の外にない。この條の本文はそれを言っているのではあるまいか。すると節畧會の三字は、畧會即ち仲買人に貸して利殖させ、その中から二割の利息をとるという意味にならなければならぬ。節は調節の節で、金錢を畧會に貸して平均利息を出させることを言うのであろうか。

五 貨殖傳物價記事の譯文と一覽表

以上で引用文中の重要な個處に對する解釋は大方終つたと思う。そこで最初に立返り上述の趣旨に従つて全引用文の翻譯を試みたい。

(前段) 封建諸侯はその領内から上る租税を收入とする。一年に平均一戸から二百錢であるから、千戸に封ぜられた諸侯の收入は二十萬錢であり、朝覲聘享などの交際費をその中から支出しなければならない。併し庶民の農工商賈の家でも、錢萬錢を持つていればそこから二千錢の利益を生み出すことができる。だから百萬の資産があれば年收二十萬が普通で、更徭租賦のような税金をその中から支出し、その餘りで衣食に好美を恣にすることができる。そこで諺に言う、陸地の牧畜業ならば、毎年馬五十匹、若しくは牛百匹、若しくは羊五百匹、沮洳地では豕五百匹を増殖出賣するに足る獸群をもつ牧場、水濱ならば常に千石の魚を蓄えている池、山地ならば千章の材が伐り出せる山林、安邑では千本の棗樹、燕秦では千本の栗樹、蜀漢江陵では千本の密柑の樹、淮水の北、常山より南、河濟の地方では萩(梓)の木千本、陳夏では千畝の漆樹、齊魯では千畝の桑田麻田、渭川では千畝の竹林、また人口の多い殷賑な都市に接しては、千畝の肥沃な田地、若しくは千畝の卮茜などの染料植物、千畦の薑韭をうえた畑、以上のうち一つを所有する者はみな資産百萬に相當し、その收入が千戸侯と同等である、と云云。まことにこれらは打出の小槌か寶の山かである。市場に商

賣に出る必要なく、異國へ販賣に赴く世話もなく、黙つて坐つていれば他人が買ひに来てくれる。窮屈な宮仕えする必要もなく安樂な生活が送れるのである。

(後段) いつたい人民というものは、自分の財産より十倍の者には一目おく。百倍の者には尊敬を拂い、千倍の者には喜んで使われ、萬倍の者にあえばその奴隷になり下るのは、言わば自然の勢いである。ただし貧しい資本で富を求めるには、農業は手工業に及ばず、手工業は商業に及ばない。刺繡のような利益ある加工業でも市場へ行つて商業をするには及ばない。商工業は末業として蔑視されるが、實はこれこそ貧者の生活手段と言ふべきだ。交通に便利な大都市へ出て一年に二十萬の収益を上げるには、醸造業なら一年に酒千醸、若しくは醃醬千瓊、若しくは醬千甌を製して賣ればよい。肉屋なら牛羊彘をそれぞれ等分に合計一千匹を買つて屠つて肉にして賣ればよい。商賣ならば穀物千鍾、若しくは薪藁の燃料千車分、或いは同じもの船千丈の積載分、若しくは材木千章、若しくは竹竿萬个、若しくは輶車百乘、若しくは牛車千輛、若しくは漆器千枚、若しくは銅器千鈞、若しくは素木・鐵器・卮茜千石、若しくは馬二百匹、若しくは牛五百匹、若しくは羊か彘の各二千匹、若しくは奴婢百人、若しくは筋・角・丹沙の各千斤、若しくは絹布・眞綿・細麻布の各千鈞、若しくは文采千匹、若しくは楊布・皮革の各千石、若しくは漆千斗、若しくは麩麴・鹽豉の各千荅、若しくは鮑鯊千斤、若しくは鰕千石、若しくは鮑千鈞、若しくは棗・栗各三千石、若しくは狐鼯の裘千枚、若しくは羔羊の裘千石、若しくは旃席千具、若しくは上述の外の果菜千鍾を買つて二割の手數料をとつて賣ればよい。いちばん手濡らさずに出来るのは現金千貫(百萬錢)を握つていて、それを駟儉に貸して二割の利息を取ることである。しかしそんなに多くの資本を是非もたねばならぬ必要はない。資本は運轉次第だ。手數料を貪りすぎると運轉回數が遅いから資本が多く要る。薄利多賣でやれば運轉が早いから小資本ですむものだ。だから貪賈が三回運轉する間に、廉賈は五回の運轉をすまず。そして資本金延べ百萬に對する利益は何れも年二十萬錢となつて、前に言つた千乘の封建諸侯と肩を列べ

ることができる。ざつと言えばまアこんなものである。他の雜業でも支拂つた金が返つてくる時に二割増えていなければ、それは儲けがないに止まらず、損をしたと言うべきである。

更に分り易いように、以上の中の數量を表にして示せば次の總表のようになるが、それ前にこの小論の結論を簡単に述べておこう。史記貨殖傳の物價表中、牧畜に關する部分は他の部分と構成を異にする。そしてその表現上、牧畜の部分が特に前段と後段との間の連絡が密接である。恐らくこの部分だけが獨立した材料として司馬遷が入手したのであろう。そしてこれを原として彼が他の部分を創作したか、或いは既にあつた材料をつぎ足したものであろう。ともかく二種の起原を異にした材料がつぎ合わされて成立したものであることは確かだと思われる。

次に史記や漢書の注釋の價值である。もし私の上述の考證にして誤りがないとすると、從來の注釋には随分出鱗目が多いことになる。孟康などは三國時代の人であるから、司馬遷からは兎も角、班固の時から百餘年しかたつて居らぬ。それが誤つた説を平氣で傳えたとすると、注釋は古いから確かな解釋だとは一概に言えなくなる。尤も孟康については、魏志卷十六杜恕傳注に魏略孟康傳を引き、彼が後宮の緣故により散騎侍郎に任ぜられたことを述べた後で

康既無才敏。因在冗官。博讀書傳。

とあり、あまり頭のよくなかつた人であつたらしい。注釋家には得てしてそういう人物が多く、創作する才敏がないが、頭の廻り方が鈍い代りに案外記憶力がよく師説を正直に傳えてくれる場合もある。その點で注釋なしでは古典は讀めぬが、但しその信憑性には自ら限度のあるものである。

それにしても先入觀は恐ろしいものである。もし孟康がなまじいに牛の蹄角を合せて六だと計算しておかなかつたならば、後世の讀者は誰でも牛の蹄は二つに割れている位のことを知つてゐるから、自分の考えて間違ひなく讀んだであらう。併し一旦注釋家に謬説を吹きこまれると、なかなかそこから抜け出られない。私の如きも注釋から完全に自己を解放す

るまで三十年かかったわけである。或いはこんな廣言を吐きながら、實はまだ魔術から醒めずにいるのかも知れない。

業種	原	文	生 産 地		業種	原	文	市 場		備 考
			資 本 (百圓)	年 産 (十萬)				數 量 (百圓)	單 價 買	單 價 賣
牧蓄	牧馬二百蹄	牛蹄角千		五匹	馬蹄敵千	牛千足	五匹	二千	六千	四千(居延四五五)
	千足羊・鹿			二匹	羊鹿千雙		五匹	二千	二千四百	二千五百(居延四五五・四六三)
				四匹	鯨千石		五百	六百	六百	羊九百(居延二七二)
養魚	千石魚陂		二〇〇石	二〇〇石	木千章		二〇〇石	千	千二百	
木材	千樹萩・千章之材		二〇〇章		果栗千石者三之		二〇〇石	三百卅三	四百	蜜一石二千(居延四二八)
果栗	千樹栗・栗		二〇〇樹		漆千斗		二〇〇斗	千	千二百	廿兩帛四三百七十(居延三五九)
菜	千畦薑韭		二〇〇畦		帛絮細布千鈞		二〇〇鈞	千	千二百	帛四四百五十(居延二九三)
漆	千樹漆		二〇〇樹		竹竿万个		二〇〇个	百	百二十	九機布四三百三十三(居延一六九)
桑麻	千畝桑麻		二〇〇畝		羅纈千鍾		二〇〇石	百	百二十	梁粟石百十、大麥石百十、粟粟石百五(居延三一八)
竹	千畝竹		二〇〇畝		厄茜千石		二〇〇石	千	千二百	小奴萬五千、大婢二萬(居延四六三)
田地	千畝畝鍾之田		二〇〇畝		僮手指千		二〇〇人	萬	萬二千	
厄茜	千畝厄茜		二〇〇畝		薪藁千車船長千丈		二〇〇車	千	千二百	
					軛車百乘		二〇〇乘	萬	萬二千	萬(居延四五五)
					牛車千兩		二〇〇兩	千	千二百	二千(居延四五五)
					木器樂者千枚		二〇〇枚	千	千二百	
					銅器千鈞		二〇〇鈞	千	千二百	
					素木鐵器千石		二〇〇石	千	千二百	
					筋角丹沙千斤		二〇〇斤	千	千二百	
					文采千匹		二〇〇匹	千	千二百	鶉綵匹千(居延五一〇)
					楊布皮革千石		二〇〇石	千	千二百	
					鞆麤圍鼓千苔		二〇〇苔	千	千二百	
					船檣千斤		二〇〇斤	千	千二百	

補注

- (1) 羅籀千鍾。史記には羅千鍾とのみあり、漢書には籀千鍾とのみある。恐らく互いに相補つて羅籀千鍾とすべきものであろう。
- (2) 馬蹄噉千。噉字を史記には足扁に造っているが、噉がもし口を意味するならば、漢書に従つて口扁に従うべきであろう。本論においては凡て漢書に従つて口扁の噉で統一することにした。
- (3) 蹄角千。第二表を更に均衡のとれたものにしようにと思えば、Bが125になると都合がよい。そうすれば完全に $A||B||C||D$ なる比例が成立する。そのためには蹄角千の角を除けばよいが、また考うるに125という数

子貨	屠	釀造			
		醬千瓶	醕千瓊	酤千釀	
金錢千貫	牛羊鹿千皮	狐鹿裘千皮 羔羊裘千石 旃席千具	鮑千鈞 一〇〇鈞 一〇〇皮 一〇〇石 一〇〇具	千 千 千 千 千	千二百 千二百 千二百 千二百 千二百
	牛 羊 鹿 一〇〇 一〇〇 一〇〇	千 千 千	千 千 千	千 千 千	千二百 千二百 千二百
	鹿 羊 牛 五百 六百 六百	千 千 千	千 千 千	千 千 千	千二百 千二百 千二百

- 字はラウンドナンバーでない。たとえ比例が不精確になつても、原文の文字を濫りに改めず、ラウンドナンバーをそのまま存しておいた方がよいであらう。
- (4) 魚賣。漢書注はこの所殆んど同文であつて賣の字が無い。これは史記正義の方がよい。
- (5) 食買三之。東方學報第二輯、拙稿の餘白に「食買と販賣」なる題を附して説明した。これが私が史記の注釋から解脱する第一歩であつた。